人々が本当に幸せに暮らせる社会とは？ ―べてる式×とびら式

2017年11月26日 ／ 東京藝術大学 美術学部中央棟1階 第1講義室

向谷地生良

（ソーシャルワーカー、浦河べてるの家／北海道医療大学）

西村佳哲

（働き方研究家、リビング・ワールド代表、プランニング・ディレクター、とびらプロジェクト アドバイザー）

稲庭彩和子

（東京都美術館学芸員 アート・コミュニケーション係長）

伊藤達矢

（東京藝術大学 美術学部 特任准教授 とびらプロジェクト／Museum Start あいうえのプロジェクトマネージャ）

人々が本当に幸せに暮らせる社会とは？―浦河べてるの家の実践から

向谷地生良

みなさんこんにちは。向谷地です。北海道の浦河町からやってきました。浦河町は札幌から約180キロの東南にある日高管内の中心町で、さらに40キロ進むと襟裳岬があります。ちょうど東京都の2.5倍の面積があるのですが、人口が7万人弱です。非常に人口密度の低いまちなんですね。このまちで今から35年前（1983年）に「浦河べてるの家」（以下、べてる）の活動がはじまりました。

浦河にはいろいろな特徴があります。たとえば全国学力テストです。北海道というのは全国でも学力レベルが下位の地域なのですが、その北海道の中でも一番低い地域が日高です。学力は経済力の反映であるといいますから、この地域というのは、経済的にも非常に厳しい地域です。その地域の中で、精神障害、統合失調症などを抱えた若者たちというのは、さらなる厳しい環境の中での暮らしを余儀なくされてきました。

浦河町は人口12,000人ちょっとの小さなまちで、私が暮らした40年の間に人口が4割近くも減りました。その浦河の特徴の一つが、町民の3割が先住民アイヌの人たちだということです。これは全国的に見ても他にないんじゃないかと思います。そして、やはり歴史的な経緯から、アイヌと朝鮮人の血を引く人たちが多いんですね。日本は朝鮮半島を植民地にしていたので、多くの朝鮮人が戦前の強制徴用ですとか、歴史的経緯の中で北海道に労働力として移り住んだ、または来ざるをえなかった。その人たちと先住民の人たち、そして明治以降に本州から入植してきた人たち。そういう人たちがつくってきたまちです。

そんな中で、心に病を抱えることがあります。「こころを病む」ということは、一人の人間の“苦悩が最大化した状態”と言うことができます。そのような心に病をかかえてしまった人たちが入院する場所として、精神科病棟が地域に受け皿としてあったわけですね。鉄格子のあるような病棟です。誰もこういうところに入りたいとは思わないと思いますが、この鉄格子の中で若き日の青年時代を過ごさざるをえなかった人たちが、べてるの人たちです。

40年前の私は、この精神病棟の一室に部屋を借りてソーシャルワーカーとして仕事を始めました。過疎が進むこのまちで、統合失調症などの精神病や依存症を経験した若者たちと交流活動を始めたんです。懐かしい思い出です。

日本の精神医療の構造

日本の精神医療は、戦後の3つの悪しき構造を、今も引きずっています。それは、精神医療が、本来の目的を見失い、人を囲い込む“精神「囲」療”に、看護が、人を管理する“「管」護”に、そして、福祉が人を服従させる“「服」祉”になっている。

人の命を救い、健康を回復し、安心して暮らすことに向けた専門教育やトレーニングを受けてきたはずの専門家たちが、なぜこういったパターナリズムに陥るのかというのは、ずっと私の研究テーマとなっているのですが、これは精神医療の分野だけではなく、教育においても企業においても、日本という国そのものも、こういうパターナリスティックな構造に陥ってしまうような、深い病を抱えているのかなと思いました。

最近、青色LED開発でノーベル物理学賞を受賞した中村修二氏の本を読んでいたら、彼の所属するアメリカの大学から日本の有名大学に招聘された研究者が、「日本という国はあまりにも支配、管理、干渉が多くて、まるで共産主義国家のようだ」と言って1年で帰ってしまったというエピソードが紹介されていました。こういうある種、日本独自のパターナリスティックな構造があるわけですね。「何が大切か」、ではなく「自分の立場」を重んじる文化、和を乱さないという文化の中で、失われる個人の持ち味、そんな中で、私たちは心の病を抱え、そして、回復しにくい社会をつくっているような気がします。

「金儲けしないか？」―べてるのはじまり

私と同じ年齢ですが、中学生の時に病気（自称、精神ばらばら状態）をかかえ、入退院歴40回のつわもので早坂潔さんという人がいます。「ミスターべてる」と言われていますが、今から35年前、私は潔さんに「一緒に金儲けしないか」と持ち掛けました。すると潔さんは、「金欲しいな！」って言って、これま

でで一番元気になりました。どんなリハビリよりもどんな精神療法よりも効いたのは、「金ほしくないか？」という言葉でした。そこから、べてるがはじまったんです。

この「金儲け」というのは、従来「社会復帰」と語られてきたものを「社会進出」に変えて、「作業」といわれていたものを「起業」に変えて、「きちんと真面目に」と語られていたものを「安心してサボるにはどうしたらいいか」というように、私たちなりの実感に基づいた言葉に切り替えていったわけです。

彼らとこれまで40年ほど取り組みをして、日高昆布の産直ですとか、通販ですとか、地域の中で喫茶をするなど、様々なことをして活動を広げてきました。それぞれ非常にユニークで豊かな経験をしている人が多いんですね。その豊かな経験を自分たちで抱えておくのはもったいないということで、映像や出版につなげて、毎年2,3冊ずつ本を出版し、その印税でまた投資活動をまわしていく、というようなことをやっています。

40年で浦河の人口が4割減りました。べてるの活動は35年前に潔さんたちを中心に起業してはじまったのですが、今は職員90名を超える大きな事業所となっています。

統合失調症を持った人の見ている世界

統合失調症を持った人はどんな世界を見ているのか、少しだけ紹介したいと思います。10年前にニュースでやっていた映像です。コンピューターグラフィックで統合失調症の人たちの見ている世界を紹介するというもので、アナウンサーがゴーグルを着けていますが、このゴーグルを着けた人には、目の前にあるものが歪んだり、消えたり、ありもしないものが見える幻視が現れます。そして聞こえるはずのない囁き声や叫び声が、幻聴として聞こえます。幻聴は「悪人！」とか「嘘つき！」といった悪口が多いです。いろんな人が喋っている音が聞こえています。とても怖いですね。

こういう経験を持った人たちが、実は私たちの身近にいるということなんです。精神疾患や統合失調症が象徴する心の病というのは、このように、五感に様々な歪みやひずみが出てきて、自分が見ているものと周りが見ているものとのズレを生じさせます。それがトラブルになってしまう。私たちは、そういった現実を抱えた人たちを、病院に長い間入院してもらって治すということをやってきたわけですが、そうするうちに、病棟をいくらつくっても、ベッドをいくらつくっても足りないという状況になってきました。結果的には、世界の精神科のベッドの2割を日本が抱えこむことになってしまったんです。先進国に比べて、ベッドの数10倍、飲ませている薬の量10倍、しかし回復して退院する人の割合は10分の1。日本は、心の病を抱えた人たちの収容所列島のようになってしまっています。非常に恥ずかしい状態になっているわけです。これは何とかしなければなりません。

そのような中で、そういった経験をした人たちと浦河でどういうコミュニティをつくってきたかということを、少し見ていただきたいと思います。

当事者研究―豊かな世界として可能性を認めること

私たちは、統合失調症などを抱えた人たちの持つ世界を、人の持つ豊かな世界のひとつ、可能性のひとつとして認めながら、それを持っている人たちと共に働きながら生きていく、ということをやってきました。

べてるの家が年に1回行っている「べてる祭り」の紹介をします。べてるの家では「当事者研究」とよばれるケアを実践していて、今、その成果が世界的に注目されてきています。このべてる祭りのメインイベントは「幻覚＆妄想大会」というもので、べてるのメンバーが実際に体験した幻覚や妄想、幻聴を発表して、そのユニークさや独創性を面白おかしく表彰するというものです。私たちは幻聴を「幻聴さん」と呼んでいます。

例えば大崎洋人さん（故人）が普段見ている幻聴さんは、身長2cmの「ボクやねん」という、大崎さん自身の顔に手足が直接付いているような姿をしたもので、この「ボクやねん」がそのあたりをぴょこぴょこ歩いているわけですね。また別の時は、1m18cmの幻聴さんが、私たちがいる空間の中をぽんぽんぽんぽん、バネのように跳んでいるんだそうです。大崎さんは、「もしよかったら一匹差し上げますよ」と言ってくれます。ある人は家に帰ると、台所の隅に「死神幻聴さん」がひっそりと座っている。ある人は「うちの爺さん」という幽霊幻聴さんがいつも家にふらふら遊びに来る。

こういう経験を持った人たちが、自分の経験を非常におどろおどろしい世界として恥じて閉じながら、生きているわけです。こういう世界のことを話すと、周りから変な人だと思われるんじゃないかと、自分の言葉を封じてしまう。そういった生活を余儀なくされている人たちが浦河の中で働くにはどうしたらいいのかということを、僕たちはいつも研究してきました。それが「当事者研究」という活動につながっています。

当事者研究というのは、それぞれが持っている経験を持ち寄って、わいわい一緒に研究しようというものです。例えば、ニコニコと笑っているはずの人の顔が、突然にらんでいるように見えてしまうという状態についてみんなで研究していくと、身体との関係がだんだんわかってきました。お腹がへっているときには人の笑顔や笑い声が素直に受け取れず、馬鹿にされているように伝わってしまっていることが、視覚に影響していたんです。さらに研究していくと、今まで幻聴というのは、「駄目だよ」とか、「死ね」とか、だいたい悪いことを言ってくるのですが、この声は、実は自分の考えや周りの人間関係や社会の中に飛び交う言葉や空気を取り込んだ上で、「声」として聞こえて来るということが、だんだんわかってきました。これを、「社会の空気取り込み現象」と私たちは呼んでいます。社会の空気を集塵機のように取り込んで、

言語化していくということは、本人の思考や感情、人間関係の質が、「幻聴さんの性格」に影響している可能性があるんです。

こういったことから、心の病を抱えたこの人たちだけを治せばいいということではなく、この社会自体が変わっていくことが究極の回復につながるのではないかと私たちは考えています。研究者が原因の究明をして、臨床家が治療方法を考えたり、支援をして当事者の回復や問題解決を促すという従来のやり方ではなく、これからは、みんなが協力しあって、共に回復を目指すという「協同」が、社会の中で大切になっていくんじゃないかと思います。そしてむしろ、こういった経験を持った人たちから研究者や臨床家が学ぶという逆の流れが、社会の中に生まれてくるんじゃないか、とも思っています。それが、当事者研究が注目される理由でもあります。

活動の中から生まれてきた、べてるを支える哲学

べてるには、活動を支える「3つの哲学」があります。

まず「苦労の哲学」です。「自分の苦労を取り戻す」、「今日も、明日も、あさってもずっと問題だらけ、それで順調」。これは、私たちの人生が、いつも曖昧で、不確かさに満ちているということを受け入れながら、生きるということです。また、「自分の苦労をみんなの苦労に、みんなの苦労を自分の苦労に」という、“苦労の循環”を起こしていく。それから「弱さの情報公開」。弱さを前向きに発信していくと、人は助け合い、組織や社会は動きだします。

『なぜ弱さを見せあえる組織が強いのか―すべての人が自己変革に取り組む「発達指向型組織」をつくる』(英治出版,2017)という、ハーバードの心理学者がまとめた本が2017年8月に出ましたが、これをメンバーがネットで発見して私に教えてくれました。「ハーバードがべてるをパクってます!」と言うんです。彼は、アメリカが日本を支配していて、日本を陥れるために自分を監視してるという、そういう世界観を持ってる人で、いつもネットで情報を集めてるんですね。彼が私に「向谷地さん、気をつけてくださいよ」と言ってきました。本当に面白いですね。

「弱さの情報公開」という理念が生まれて30年以上経つのですが、不思議なものです。例えば、自分はみんなに悟られていると言う人たちは、本当は、誰にも悟られていない孤立感や孤独の裏返しとして「悟られている」と言います。テレビが自分のことを言っているとか、みんなが自分のことを見ているとか。だから「私は悟られています」と多くの人に語り、発信した途端に、それを聞いた人たちとの間には「悟られ」が成立しなくなる。そういった経験もしています。

二つ目は、「反転・“非”常識の哲学」です。これは、「過疎も捨てたもんじゃない」「安心してサボれる会社づくり」「勝手に治すな自分の病気」ですとか、「最近の落ち込み方はいい感じだね」というものがあります。あなたは行き詰まり方がうまいねとか、病気は悪いけど人間は超一流だねとかも、よく話します。

そして三つ目が「対話の哲学」です。「三度の飯よりミーティング」。最近は健康志向で「三度の飯とミーティング」と言っていますが、「病気で語らない、言葉で語る」に象徴されるように、対話をコミュニティの中心に据えるということです。

実際にその経験を生き抜いた人たちの経験を、話を通じて共に掘り下げて研究して、そこから生きる知恵を見出す、そういう活動の中から生まれたのが、「べてるの哲学」だなと思います。
こういったことを発信していると、最近、海外からの見学者が増えてきました。どこで聞いたのか、北海道で一番交通の便の悪い過疎地域の浦河に、毎月のように海外からお客さんが来て、いろいろとお招きいただいたりもします。来月はドイツ政府に招かれて、ベルリンで開催されるソーシャルインクルージョンの会議に参加して、「障がい者と防災」の実践を発表する予定です。

べてる式×とびら式
パネルディスカッション

西村　とびらプロジェクトというのは、ざっくり言うと、美術館をどういう社会空間にできるかということを、いろいろ試しているプロジェクトです。「美術館ボランティア」と聞いて一般的に思い浮かべるようなものとはだいぶ違っています。まず、登録している人たちは学生からお年寄りまで様々です。働いている人もいれば、主婦の方も、学生の方もいます。彼らはコミュニケーションの習慣も、言葉の使い方も全然違うわけです。そしてとびらプロジェクトでは、そういった人たちが集まって、あれしようかなこれしようかなと話しながら進めています。試行錯誤しながら進めてきて今年でもう6年目です。今日は、そのとびらプロジェクトを担当する2人から、向谷地さんへ聞いてみたい5つの質問があります。

1 人々が本当に幸せに暮らせる社会とは？
2 べてる式における超越（非日常、日常を超える、大きな尺度とのつながり）を促すポイントは？
3 べてる式のアプローチや考え方を関係者に理解を広げる働きかけとしては何を大切にされてますか。
4 向谷地さんからみてとびらプロジェクトのような活動やこういった潮流はどのように見えますか。
5 向谷地さんの活動を支えるモチベーションの源泉は？

ここからは、今伺ったお話と、この5つの質問を元に、いろいろとお話を伺っていきたいと思います。

1 人々が本当に幸せに暮らせる社会とは？

向谷地 この5つの問いなんですが、私が答えるというよりも、皆さんとのやりとりや対話のきっかけになるような発信ができればいいなと思います。

私はソーシャルワーカーなんですけれども、「ソーシャルワーク」という実践は、1860年代にイギリスで生まれました。イギリスが大英帝国として世界に植民地をたくさん持っていた、産業革命の時代です。イギリスが世界の工場のようなかたちで、ダーウィンの進化論、マルクスの資本論に代表されるようなさまざまな哲学や思想、科学を世界に発信し、まさに世界のリーダーとなっていた産業革命の時代に、実はロンドンの郊外（イースト・エンド）にどんどんスラムが広がって、貧富の格差が広がっていたんですね。そのイーストエンドのスラム街に飛び込んで、一緒に暮らしながら、貧困問題を考えようと活動する学生を中心とした若者たちがいました。「セツラー」（移住者）と呼ばれたボランティアは、その後、「セツルメント活動」として、世界中に広がります。それが後に職業化して「ソーシャルワーカー」と呼ばれるようになります。

とびらプロジェクトも、ソーシャルデザインプロジェクトという切り口でされていらっしゃいますが、ソーシャルワークの最近の新しい切り口、理論の中に「デザイン」という発想があります。クライアントが「こんなこと困っているんですけど、どうしたらいいですか？」と相談して、それをソーシャルワーカーが受けて一緒に考えていくというプロセスがあります。それは、作品のコンセプトを明らかにしてデザインをして、そしてかたちにしていくプロセスと似ているんじゃないかということで、ソーシャルワークの中でも、一連のプロセスをデザインの中で考えていくという新しい動きがあります。デザイナーとのコラボというのが海外では特に活発に試みられている領域なんですね。そういう発想でいうと、今回のソーシャルデザインプロジェクトというのは、人の人生をデザインするとか、社会をデザインするとか、デザインし直すとか、そういったこととともつながるし、それは偶然かもしれませんけど、ひとつの必然というような気がします。

人が本当に幸せに暮らせる社会って何でしょう。ひとつの例です。頭の中で声が聞こえて「死ね！」とか「お前は生きてる価値がない」という声に翻弄されてどうしようもなくて家に引きこもっていたある女性が、それをきっかけに浦河に来て、べてるで活動し、働いているうちに、だんだん体調が良くなってきました。だんだん自分を責める声が薄くなってきて、否定的な感情がどんどん弱まって安心して暮らせるようになったんですね。ある日、彼女が私に電話をかけてきて、「向谷地さん、大変です」と言うんです。「本当にもう声が聞こえなくなっちゃったんです。困りました。このままじゃ私もう、浦河にいられないんじゃないですか」。私は彼女に「大丈夫、生きることはそんなに幸せじゃないから。そんなに簡単に人間って幸せにはならないし、幸せだと思っていたら、ちゃんと次の苦労が襲ってくるから。人間って、そんなに幸せじゃなくても生きていけるから大丈夫だよ」と言いました。彼女は「ああよかった」て言ったんですね。

それからもう一人、統合失調症の方で、自分の考えが周りに全部見られているような、悟られている

ような感覚がある方がいました。彼女の言葉を借りるならばそれは、「銀座のど真ん中で囲いのないトイレに入っている感覚」なんだそうです。そんな彼女が縁あって浦河に来て、スタッフとして働いて、講演などであちこちを飛び回るようになったときに、彼女は「ああ、自分は幸せだ」と思ったんですね。しかしその瞬間、強烈な不安や恐怖感が襲ってきた。この幸せがいつかまた失われるんじゃないかって。そのとき、たまたま講演で飛行機に乗るところだったので、「飛行機が墜落するんじゃないか」と心配になってきたんです。彼女は仕事もできるようになって、ちゃんとお給料も貰えるようになって、ちゃんと講演もできるようになって、ちゃんと社会的な責任を果たせるようになったと思ったら、ものすごい恐怖感に襲われた。声も聞こえなくなって、自分は病気の世界から卒業なんじゃないかと。そんな恐怖感を抱いて飛行機に乗って講演に行ったんですね。私は、その彼女にも、「人生、そんな簡単に幸せにならないから大丈夫だよ」と言いました。会場について車を降りたら、突然また声が聞こえてきて、すると彼女は思ったんですね。「あ、まだ病気治ってなかった。よかった…」。これ不思議ですよね。

子供のときから「がんばれがんばれ」という囁きがずっと聞こえて、その声に背中を押されてずっとがんばることしかできなかった松本寛くんという若者がいます。もうがんばりきれないほどがんばってしまって、とうとう入院せざるをえなくなって入院したんですけど、彼は「やっと病気になれた」と言いました。そして病気になったあとの講演で、「分裂病は友達ができる病気です」と言っていました。製薬会社に行って、どんな薬の開発を望んでいるかと聞かれたときにも、「お願いですから幻聴だけは取らないでください」と言ったんですね。これは自分の友だちであると。病気が治ってしまったら失業します、と言うんです。人の幸せって何なんだろうって思いますね。

最近当事者研究をやっていて、もちろん声が聞こえなくなって安心したという人もたくさんいますが、その反面、声によって自分は助けられているという人たちがかなりの割合でいるのも事実なんですね。そういう意味で、幸せって何なんだろうと私は考えています。べてるでも、「今日も明日もあさっても、ずっと問題だらけ、それで順調」と、通常の幸せ感とは違う幸せ感を大事にしてきました。

それと、べてるの中で一番大事にしてきたミーティングは何かというと、「お葬式」というミーティングです。仲間が亡くなるとみんなが集まってきて、笑ったり喋ったり、亡くなった人を囲んで、みんなで楽しいミーティングのようなお葬式をするんです。他の病院では、仲間の死を知らせるとショックを受けるかもしれないということで、お葬式だとか、仲間が亡くなったことを知らせない配慮をしているところもある中で、私たちはお葬式を大事にします。そうするとメンバーは、自分が亡くなったときもこういうかたちでみんながお葬式をしてくれるんだなということがわかるので、そういう安心の仕方が、あると思うんですね。

西村 人は役割があるとか、自分の居場所があるとか、そういうところが大事だということですね。

向谷地　病気を持っているっていうのも、ひとつの役割になれると思うんです。特にこういう病というのは不思議なところがあって、まあ、どんな病気もそういうところがあるのかもしれませんけども、心の病というのはある意味、社会を映し出す鏡なんですね。だから、その人だけが治ってもしょうがない。社会全体が回復していかなければその人の病気はどうしようもないという、そういうお互いさまの中にあるし、まさに、「人は人の中で人となる」ということが実感できる病気ですね。

さっき統合失調症の人の経験の話をしましたけれども、「死ね」という声というのは、自分は社会の中で役に立っていない、死んだほうがいいと思っているその人自身の自信のなさ、それと、競争社会で、違う価値を志向している社会の空気、そういう両方の軸が象徴されて、「死ね」という声になる。ところが、面白いことに自分を褒めるようになって周りから褒められる声が増えてくると、今度は声が「おい、お前最近いい奴だぞ」とか、褒めてくれるようになるんですね。ということは、この病を抱える統合失調症の人たちは、非常に敏感な分だけ、良質な声もどんどん拾ってくる。そういう意味で、私たちの言葉の質、関係の質が非常に問われているんだと思うんですね。

しかもこれはアナログな世界でないとダメで、ネットで「最近元気だね、がんばってるね」と褒められるよりも、ちゃんと実在するかたちで、アナログな関係でのつながりの積み重ねが、その人の現実を変えていきます。ネット社会と対局にあるような世界ですね。病気を持っているということも人世においては大切な役割になるということです。

西村　関係の質が大事なのであって、その人だけが治ればいいわけじゃないと。

向谷地　そうですね。

西村　伊藤さん、稲庭さんは、とびらプロジェクトの立場からは、「本当に幸せに暮らせる社会」のイメージはありますか。

伊藤　それを今考えているところなので、答えはパッとは出てこないんですが。問題をどう開いていくのか、個人が問題だと思っていることを、誰かに共有できるような場所だとか、「あ、これ喋ってもよかったんだ」と思えるような場所がまずないと、今話している「幸せな社会」にたどり着くことができないような気がしています。でもそういう環境をつくるのは、言うほど簡単じゃないなという思いもあります。それってなかなか、理解されにくい環境だったりとか場づくりだったりしますよね。ですので、向谷地さんが考える「幸せな社会」ってどういうことだろうかということと、その開いていくような場って、どうやったらできるんだろうという思いから質問しました。

稲庭　私はいつも作品を見るたびに、作品ってすごく気持ちを開いているものだなと思うんですね。

例えばゴッホはまさに精神的な病をかかえながら作品をつくっていたんですけれど、ゴッホの気持ちというのがその作品の隅々にまで宿っていて、それを何らかのかたちで私たちはキャッチをして、そのことによって、自分の頭の中でも思考がまわりだすと思うんですね。150年前に描かれたときの気持ちが、作品を介して150年後の人に伝わるというような機能が作品にはあって、そんな風に、人々の気持ちがつながっていくような回路を芸術は持っていると思うんです。でも、今の私たちの社会の中ではそういう機能を持っているものがすごく限られてしまっているので、それをどういう風に回復していけばいいのかなと。それをとびらプロジェクトでやっていきたいなと思い、質問させていただきました。

向谷地 そういう意味ではデザインそのものに、人が人になるというか、回復できるような要素があると思いますね。

べてるのみんなと活動をしていると、本当に、人間は歌うこととか表現に飢えているなと感じます。べてるの人たちはみんな自然に踊りだすし自然に歌うし、自然に描いたりします。みんなといると、自己表現というのは、人間が人間であるための基本的な、生命的な部分なんだなということがすごくわかるんですね。こういう様々な経験を持っている人たちが、見えるものを見えると、聞こえるものを聞こえると、そのまま表現していいんだと。そういうものが受け入れられたときに、それまで「死ね」と聞こえていた声だとか、目の前におどろおどろしく見えていた悪魔的なイメージが、非常に優しいキャラクターに変質していく。それを考えると、昔の人たちが踊ったり、変な着ぐるみを着て収穫を祝ってわいわい騒いだりして、芸能や祭りが生まれてきた背景というのがよくわかる気がしますね。

2 べてる式における超越（非日常、日常を超える、大きな尺度とのつながり）を促すポイントは？

西村 今稲庭さんが言われた、ゴッホの絵が開かれているというお話。作品を前にして、いつもとは少し違う位相で自分を表現することができたり、人と関わりあうことができたりするようになっているというお話なんですが、例えばホースセラピーのように、生き物を介して人がこれまでと違う位相で関わり合えるようになることはあると僕も思います。べてるでは、それが何になっているんだろうという問いがあったわけですよね。今、自然に歌い出す、自然に踊りだすという話があったと思うのですが、他にももっとあると思われますか。

稲庭 とびらプロジェクトにもさまざまな関心を寄せてくださる方がいて、視察にも来ていただくのですが、こういったコミュニケーション活動をしたいと言われたときに、それが美術館ではない場合、コミュニケーションを深めていったり広げていったりするためのメディアは他に何がありますかと質問をされることがあって、なかなかそれに答えられていないので、べてるではどうなのかなと思いました。

向谷地　私たちは、7,8人集まったときに、それぞれホワイトボードに「自己病名」とか「苦労ネーム」（例：人の苦労食べ過ぎ現象ー困っている人を放っておけなくて面倒を見ているうちに自分がアップアップ状態になる）を書くんですよね。私は「先天性忘れ物症候群・諦めタイプ」なんですけど。みんなが自由に自分の自己病名なんかを書くんです。それを眺めながら、みんなが自分のプレゼンをして、それはどういうことですか？って質問したりしてわいわいやるんですけど、これが面白いんですよね。

伊藤　この質問での、「べてる式における超越」というのには、病気がひとつあるんですね。

向谷地　そうですね。これは、精神科医に「あなたは〇〇病です」と診断されてきた現実を、ユニークな病名を自分でつける、というやり方で、「病気も意味のある大切な持ち物」として反転させるという発想があります。先日それを、当事者研究の全国大会でやったんですが、誰が誰だかわからない状態で、集まった人でわいわい「自己病名」の紹介をやりました。そうしたら、「ポテトチップス止まらない症候群・メタボタイプ」の人が、“ポテトチップスの食べ過ぎ現象”を解明したいとお題を出して、それについてべてるのメンバーも含めてみんなでわいわい研究したんですけど、すごく面白かったんです。べてるのメンバーたちもみんな意見を言ったりアドバイスしたり、わかっちゃいるけど止まらないよねって言いながら、依存症の人がアドバイスしたり。終わった後にそのポテトチップのお題を出した方に、ご職業は何ですかと聞いたら「弁護士です」と言っていました。そうなるともうお互い、誰が誰だかシャッフルされて面白いですね。そんなことをやってます。

西村　最初の質問に戻るんですけど、向谷地さんは大学でソーシャルワーカーとしての教育を受けたんですよね。そこでは人間の幸福っていうものは、どういうふうに定義されていたんでしょうか。

向谷地　ソーシャルワークが求める人間の幸福というのは、観念的なものではなく、基本的には「人権と社会正義」に基づいて、どんな人でも人間として尊重されて現実的に安心して生きられる社会をつくること、ソーシャルワークは、それに向けた変革のプロセス、と言えると思います。ソーシャルワークは、世界人権宣言に謳われた人権のあるべき姿をひとつの基準にしています。そのために暮らしや教育や労働、またはスピリチュアルな面も含めて、教育を受けました。しかし人権の状況というのは国によって違いますし、国によってはソーシャルワークの人権の理念を警戒して受け入れないところあります。それでも、世界の統一したソーシャルワークの定義を、時間をかけて議論して改定を重ねてきました、今の定義は、2014年に私も出席したメルボルンの世界大会で定められたものです。

西村　現代では、人権は大事だっていう言葉を聞いたら、みんな簡単に了解すると思うんですね。

賛成できないなんていう人はそんなにいない。では、人間の権利とは何なのかと詰めていくと、その先に答えがあると思うんです。それは稲庭さんと伊藤さんにも聞きたいんですが、人が人としていられる権利というか、人権って何なんだと思いますか。個人的にも捉え方が違うと思うんですが。

伊藤 有り体かもしれませんが、やっぱり、自分が自分としてそこにいていいよと言われることが担保されている状況だと思うんですよね。「人権」っていうとまるで「僕自身の権利」という感じがしますけど、でも人権が守られるっていうのはむしろ周辺の環境の話で、周囲の人からその人がその人であっていいと認められているって状況だと思います。だから、お互いに認め合えているという、それが人権かなと感じています。

稲庭 今の伊藤さんの話ともつながるんですが、とびらプロジェクトの中では伴走というのを大切にしています。共にあることです。共にある在り方として、向谷地さんの本の中にも「ポジティブに降りていく」という言葉がありましたが、相手と共有して、その人がその人のままそこにいていいみたいな状況があるのが幸せだし、人権が守られている感じがすると思うんですね。それはやっぱりひとりだと成り立たなくて、伴走しあう相手が複数いる、コミュニティの状態というのが大切なんじゃないかなと感じています。

西村 向谷地さんはどうでしょう。

向谷地 不当に拘束されたり行動を制限されたりしないっていうのは、基本的人権のひとつなんですけれども、犯罪者と精神障害を持つ人だけは、それが一定の条件をもとに解除されるんですね。犯罪者だったら悪いことをしたら刑務所に入る。精神障害を持つ人だったら、いわゆる強制入院とか、まさに檻のようなところに入れられて、拘束されたり縛られたりする。医療という名の下に人権が解除されるということが、こういう人たちには唯一認められているんです。

このように、精神障害、特に統合失調症を持つ人たちは、独特の物の見え方、感じ方から一般的な基準でいう“付き合いやすさ”から言うと孤立を強いられて、最終的には人権を解除して拘束してもいい、閉じ込めてもいいという、そういう立場に立たされてしまう。人権という、究極に守られるべきものからも排除されやすいんです。そういう意味では、一般社会の持っている人権感覚というのは非常に脆くて、結果的には、社会の安全を守るために、精神障害を持つ人の人権は制約してもいいという現状を多くの人たちが了解している、本来、「人権を守る」という立場にある専門家ですら、結果として“囲い込んで管理して服従させる”という状況に加担してしまう構造があるなと、今やりとりを聞いていて思いました。

それを回復させるのは並大抵のことではないんですが、しかし少なくとも、その人たちに何がおきたのか、何が起きてそういう結果になったのかというのは、それを改善していく上では大事なことかなと思っ

ています。

対話の可能性、対話にいたるプロセス

西村 先ほど、べてるの説明の中で、アメリカに帰ってしまった研究者さんのお話がありましたね。日本が管理社会で、介入してくると。日本の精神医療の世界でこれだけのベッド数があって、しかし社会に復帰していく率が実は低いと。薬漬けなんだという話も伺いました。でもその中で、べてるというものが存在して30年、40年とやってらっしゃって、それが今世界からも注目されていて毎月のように人々が訪れる。そこには精神医療の世界でいうとどんな潮流があるのでしょうか。

向谷地 1970年代から80年代というのは、統合失調症も普通の病気だから、肝臓や腎臓の病気と同じようにきちんと治療法を確立して、薬を投与すれば治る、それによって患者は病気から解放されて、誤解や偏見、差別もなくなるという、そういった期待があったんですが、夢の新楽が続々と誕生して、それを世界の標準の5倍から10倍の量を服用させて、5倍から10倍の期間入院もさせて、じっくりと治療したけど期待した効果はさほど得られなかった。良い意味で、病気だからお医者さんが治すという論理が行き詰まって、本人も含めてみんなが協力し合って回復する ―Co-production― という考え方に変わってきています。しかも、声が聞こえる、他の人が見えないものが見える、という体験自体が即病気ではなく、それも、その人らしさの一部であり、それで生活が成り立っているのであれば、そのままでいい、というのが世界の流れになっています。今まで孤立した生活の中で「死ね！」と聞こえていた声が、仲間が増えることで「お前いいヤツだな」に変わっていく、そういう回復もある、ということです。日本では、ちょっとかなりラディカルな発想ですが、これが現在の世界の流れですし、キーワードが「対話」になってきている。

　これまではカウンセリングだとかナントカアプローチとか、科学的な根拠に基づいた心理療法を開発してきたんですけども、そうではなく、そもそも人間が人間として生み出してきた素朴な「対話」というものが、治療的な効果を持つんだということが、最近ヨーロッパの方からどんどん入ってきています。これは私たちの「三度の飯よりミーティング」というナラティブ・コミュニティと言われる浦河の文化に非常に合うんですね。

西村 そのときの対話というのは、哲学的な、心理を深く探るような難しい対話ではなくて、普通の対話ということでしょうか。

向谷地 いわゆる普通の対話ですね。対話っていうのは空気のようなもので、人が生きるために当た

り前に必要なものです。違う経験を持った人たちが、違う個性を持ちながら、にも関わらず、共に生きていける。その条件をつくりだすプロセスのようなものですね。私たちの仲間がこんなことを語っています。入院した時の話なんですが、うつ病の人、失恋して事故を起こして強制入院した人、統合失調症、自殺未遂、アルコール依存症などをかかえた人同士が喫煙室で7, 8人ほどが集まっておしゃべりしている時のことですけど、自殺未遂で入院している人が入院に至るエピソードを話してくれたことがあって「すごく思いつめて橋から川に飛び込んだんだけど、泳ぎがうまいから岸まで泳ぎついじゃったんだよね。それで通りかかった人に通報されて入院してしまったんだ」と話したら、そこにいたメンバー全員が大笑いになった、と言うんです。「さぞつらかったろうなあ」と思ったんですが、それでも話を聞いたらやっぱり笑ってしまった。でもその笑いは嘲笑でなく、温かい笑いだった。彼が苦しかったことをみんなが一緒に感じながら笑っているようで、心の中で悲しみを分け合いながら笑っている感じがして、その時に初めて「ああ、自分はこの仲間の中にいたら病気が治るかもしれない」と思ったと言っています。（西坂自然.2006.「“人格障害”の研究 その1」.向谷地生良・浦河べてるの家『安心して絶望できる人生』.NHK出版.p103-119）私は、これが対話の力だと思っています。

伊藤 その対話ができる場をつくりだすことって、なかなか難しいなと思うんですよね。例えば、とびらプロジェクトの参加者たちがやっているミーティングは年間300回くらいです。ですので、「三度の飯よりミーティング」は私にとってもすごくピンとくる言葉でした。でも、とびらプロジェクトというのは、職業も全然違う人たちが集まっているし、年齢も10代から70代までいらっしゃるので、会議のやり方ひとつとっても、言葉の使い方ひとつとっても全然文化が違います。ですので、まずそういう「対話が起こる場を作る」ということ自体を前提として引き受けてもらえるように、聞くことを意識するための講座を開催したりだとか、いろいろと準備をしてきた上で今活動しています。でもべてるに来られる人たちって、みんなが4月に一斉に入ってくるわけではないですし、これは私の想像ですが、人の話を聞かないとか、聞ける状態じゃないとか、対話にならないような状況もときにはあるんだろうなと思うんです。そんな中で、対話ができるようになっていくプロセスというのはどのようにされているのでしょうか。

向谷地 2011年の震災の後、せんだいメディアテークを拠点に、哲学者の鷲田清一さんが市民に対話を呼びかけるプロジェクトを始めていますね。その建物の入り口に「対話の可能性」というパネルが貼ってあって、その中にこう書かれていました。

人と人のあいだには、性と性のあいだには、人と人以外の生きもののあいだには、どれほど声を、身ぶりを尽くしても、伝わらないことがある。思いとは違うことが伝わってしまうこともある。（略）対話は、他人と同じ考え、同じ気持ちになるために試みられるのではない。語りあえば語りあうほど他人と自分との違いがより繊細に分かるようになること、それが対話だ。「わかりあえない」「伝わらない」という戸

惑いや痛みから出発すること、それは、不可解なものに身を開くことなのだ。

「今日も明日もあさっても、ずっと問題だらけ、それで順調」という、終わりのない、しかも生きれば生きるほどそこに苦労が起きてくるし、違った人同士の擦れ合いやぶつかり合いが起きてくるけども、それでも順調なんだという「苦労の先取り」と、この「対話の可能性」はとても近いなと思いました。

心の病というのは、人との関係の究極の行き詰まりです。これ以上生きられないという究極の行き詰まりの中から起きる状態です。心の病というのは、人の苦悩が最大化した状態のことで、対話の可能性の対局にあるものだと思います。

私たちは何気なく対話という言葉を使ってきたんですけど、昨今、フィンランドからはじまった「オープンダイアローグ」が注目されています。いわゆる「開かれた対話」ですね。ギリシア哲学の時代から「対話」は、人間と社会を創造する大切なキーワードとして受け継がれてきました。なかなか話がまとまらないとか、うまくいかないからこそ、対話というものがもう一度考えられなければならない。そして対話というのは決して、話し合いとか、打ち合わせとか、相談ではない。そのへんは、私たちには少し難しい部分があるかもしれません。劇作家で演出家の平田オリザさんが、「日本には対話がない」(平田オリザ・北川達夫.2008.『ニッポンには対話がない―学びとコミュニケーションの再生』.三省堂)とおっしゃっています。その典型が教育で、日本では教育とは「教えること」になっているんですが、オープンダイアローグの発祥の国、フィンランドでは「考えること」なんですね。何が大切か、よりも「忖度」いわゆる立場を重んじる文化の中で、そこをどう乗り越えていくのかを考えなくてはならないと思います。

稲庭　そうですね。ゼロからの対話ですとか、対話を大切にするっていったときに、対話をすればわかりあえるという前提で話されることがあるんですね。でも今おっしゃっていたみたいに、わかりあえないという前提があって、だからこそ対話をするんだっていう風になっていかないと、なかなか「なんでわかってくれないの」みたいな状態になってしまう。

状況を開いていくっていうこと自体を、相手と共有するというのは、一体どういうふうに広げていっているんですか。

3 べてる式のアプローチや考え方を関係者に理解を広げる働きかけとしては何を大切にされてますか。

向谷地　この40年で、まちの大きな事業所や会社や銀行なんかがどんどん倒れたり閉まったり撤退していく中で、なぜ統合失調症や依存症とか、一番脆い人たちが始めたべてるが、どんどん拡大して成長をとげたのか、人が集まって、お金がまわっていくのかということを考えたら、誰かが方針を決めて、みんなにがんばれって言ってもくもくと働いた結果ではないような気がしています。不思議なもんですよ

ね。ただただ話し合いをして、違ったもの同士が違ったまま、それで順調というひとつの了解のもとに時間を重ねていくと、そこから新しいものが生まれて現実が動きだす。これは、現象としてとても面白いですね。

西村 その浦河で起きてきたこと。誰かが起こしたというよりは、起こってきたことの連鎖だと思うんですけども、その只中で向谷地さんが気をつけていたことですとか、身の振る舞い方があれば教えてください。

向谷地 長年、一緒に仕事をしてきた、精神科医の川村敏明先生がいるんですけど、楽しいことが好きなお医者さんなんです。普通、患者さんが精神科外来を受診しに来て、「ここが痛いんです」とか「これに悩んでいます」とか話し始めたら、普通、精神科医はきちんと話を聴いてあげて、診断して治療をする、そういうイメージなんですが、川村先生は患者さんに「もうちょっと楽しい話しないの？」とか、「来週来るときは、もっと嬉しい話を持ってきてくれるとありがたいな」とか言うんですね。「困りごとは、仲間に相談してその結果を教えて」っという感じなんです。それでも常連の患者さんが、病気のことをあれこれと話しだすと、先生はその辺をウロウロして、花に水やったりとかですね、そういう先生なんですね。その先生はやっぱり、機嫌良くしていようっていうのを本当に大事にしているんです。それは私もそうですね。

例えば、べてるの中でも、仕事ですからメンバー同士でぶつかったり、あんなヤツとはもう仕事したくないって喧嘩したりもしますよね。もうどうしようもない、やってられない、と言ってスタッフも私に振ってくるんですけど、私はそういうどうしようもなさを見たときに、「ああ、べてるもとうとう普通の会社のようになってきたな」と思って、すごく嬉しいなと思いました。

稲庭 スーパーポジティブ、ですよね。ご著書を読ませていただいて、向谷地さんはポジティブという言葉を超えているような、スーパースーパーポジティブというものを一貫されているなと感じました。

向谷地 そういう感覚で眺めることとか、「まちにいろんな誤解や偏見がいっぱいあっても、地域の人たちやまちの悪口を言わないようにしよう」と思っています。私もこんな感覚なわけですから、当時の病棟の医長の医師から「向谷地とはもう仕事したくない、クビだ！」って追い出されたことがあったんですけれども、まあそのときもその先生の悪口だけは言わないようにって思って5年間の窓際生活を続けていました。でも決してこれは私が善良だからとかではなくて、ひとつの「人間関係の苦労の研究」の一環として、さらには、べてるの仲間から学んだ生き方としてそういう風にしてきました。そんな感じです。

4 向谷地さんからみてとびらプロジェクトのような活動やこういった潮流はどのように見えますか。

西村 4番目の質問について聞いてみたいんですけれど、ちょっとその前に向谷地さんのほうに戻ります。さっき、オープンダイアローグですとか、開かれた対話を重視する流れがヨーロッパの方から来てるという話をされましたね。それは要するに、対話性だとか対話のための空間が、この近代で失われていったということですよね。その潮流を、向谷地さんはどういう風にみているのかをもう一度聞かせてもらえますか？

向谷地 この間こういうことがありました。もう大学生の頃から20年くらい入院している統合失調症の方がいて、部屋から出られない。その主治医の先生は回診のたびに、その患者さんから「医者だったら俺をなんとかしてみろ」と苦情を言われるのが辛かった。私がたまたまその先生と知り合いになったので、その先生が彼に、当事者研究を紹介したんです。それで、私もその方とお会いすることになりました。仮にAさんとお呼びしたいと思いますが、Aさんは、病室から出ないんですよね。いろんなプログラムにも参加しない方で。私は二人のスタッフと部屋にお邪魔して話をしました。Aさんは、政治の世界に詳しくて、厚労省の〇〇課長は、今度、どこに移動となって、〇〇党の幹事長は、だれそれと親せきで、という話をとうとうと話されるんですね。そこで、ほとんどのスタッフは、ギブアップしてしますが、私は食らいつくように、振り落とされないようについていきます。「そうなんだ、面白いですね。ところで･･･」。しかし彼はそればかりじゃない、不思議な妄想的な世界、支離滅裂な世界の中に、生きている。従来の精神医学の常識から言うと立ち入ってはならない禁断の世界です。だからこそ精神科医は薬の調整だけをやって、結果、彼は25年の入院生活を強いられているいるんですけども。私たちはその禁断の世界にお邪魔して、まさにべてるのような世界をそのまま持ち込んでみました。「すみません、20年以上部屋から出られてないって伺ったんですけど、変な言い方ですが、お部屋から出ないことでどんな良いことがありますか？」と聞くわけですよね。普通は、部屋から出ないこと自体を問題と捉えるわけですけど、当事者研究的な発想っていうのは、何かそのことでメリットがあるからその人はそれを忠実に守っているんだっていうことなんですね。

Aさんが言うには、神様からテレパシーで部屋から出るなと言われて、14もの縛りもあるんだそうです。それを彼が忠実に守っていることがわかって、すごい！と思って。彼は最初に顔を合わせた時、「向谷地さんは神様を信じますか？」と聞いてきたので、いろいろとお話を聞いてわかったのが「神のテレパシー」だったんですね。「どのへんで、神様とテレパシーなさるんですか？」と聞いたら、「お腹に受信機がある、っていうんです。それを私はイラストに書きました。「そうなんですか。お腹で神様とやりとりするんですね。すごい。神様は普段何を食べていらっしゃるんですか？」とか「なんか、趣味とかあるんですか？」と、そういう世界をどんどん聴いていくと、神の世界が見えてくる。しかし私は最後に言ったんです。「それにしても正直に言って神様はひどいですね。テレパシーで指令を発してあなたを20年以上も部屋から出

さないなんて。普通、神様は人にご利益をもたらしてくれるとか、人を幸せにするみたいなイメージがあるんですけど、ちょっとひどすぎやしませんかね。私は神様に文句を言いたくなりました」。そうすると、彼が「それはやめてくれ」って言うもんですから、いろいろ考えて、「じゃあ私が神様に、あなたを部屋から出してくれるように嘆願書を出すっていうのはどうですか」って言ったら、「それもやめてくれ」と。神様との関係がこじれたら困るというので、「じゃあ私はこの嘆願書に“Aさんはこのプロジェクトとは関係ありません”と一筆入れさせてください」と言って了解を取り付けました。

嘆願書のことを看護師さんに提案したら、看護師さんも賛成してくれて、職員や患者さんにも協力をお願いしてみんなの署名をいれて嘆願書をつくってくれたんですよ。それをAさんに見せたら、彼はものすごく喜びましてね。この人もこの人もこの人も賛成してくれたのかと指で名前をなぞるんですね。そしてAさんに、「署名が集まりました。これから神様と交渉してきますんで、よろしくお願いします」と言ったら、一週間もしないうちに部屋から出るようになりましたよ。どうしたんですかって聞いたら、「急に神様からの縛りが解けて、部屋から出てもいいよってなっちゃった」と。でも14の縛りのうち、3つか4つ残ってるんですね。それはどういうものですかと聞いたら、彼は照れ臭そうに「いや、女性の胸を見るなっていう司令が出てて、まだ解けないんだ」って。それは普通に見てると目に入りますよね、って言ったら「そうなんだ。でもちょっとだったらいいんだ」って。そんな感じですよ。

だから対話っていうのはね、今までの医療の中ではそういうことをしてこなかったってことなんですね。彼らの見ている世界は異常で、ありえない世界なので、そういう人たちと対話するっていうことはタブーだったんですよ。病気を悪くするって言われて。でも私たちのような、べてる的な世界で一緒に楽しむとか一緒に世界を物語る感覚でやっていくと、その人たちの世界は本当に見事に変わっていくんですよ。これは面白いですね。そんな難しいことじゃないです。

これは決してそんな病気を持った人たちだけではなくて、どんな人たちでもどんな世界でも大事な感覚なんだなって。まさに芸術的な世界だと思います。

西村 そういうときに向谷地さんは、彼が部屋から出られるといいなとか、あるいは出してやろうとか、そういう思惑を持って関わるのですか？

向谷地 それは一番してはいけないことですね。そんな専門家としての魂胆を、しっかり脇に置いて、鍵をかけていきますね。それが大切な弁えです。一緒に今を生きる現実を解き明かしている。大切なのは、互いに“前向きに”無知であり、無力である感覚ですね。ジャズのような世界ですね。でもその人が実は部屋から出たいとか退院したいとかいうことになれば、それは一緒に考える、模索する、一緒に研究する、ということですかね。

西村 そういった関わり方が、投薬で治すとか、認知療法とか、そういうことが常識だった世界で

今見直されていっているというのは、どういうことなのでしょうか。

向谷地 そもそもの医療の目的が、その人が健康的に生きていける状態をつくること、だとしたら、悪いところを探してそこを取り去ったり、治したりするということを続けてきたわけですが、精神医療の世界で、その発想自体が、期待したほど人を健康に、幸せにしないということに気づきはじめたということだと私は理解しています。いい意味での行き詰まりですね。Aさんの例が、その一番わかりやすい例ですね。最近、「治療抵抗性統合失調症」という新たな病態が問題になっています。私の解釈は逆で、「その人なりの回復を阻む治療環境の障害」と考えています。Aさんがなぜそのように聞こえたり見えたりするのか、その脳科学的なメカニズムは、なかなかわからない。でもひとつ言えるのは、人は人として、その人なりに安心して暮らせる、居心地の良い暮らしの形がある、そのことが実現できると、結果的にその“病気の花”もちゃんとしぼむ、変化するっていう気がしますね。あまり病気だ病気だと言って薬で叩こうとしているうちに、人間そのものがだんだん弱っていく。まずは人を人としてちゃんと励ますとか、その人をありのままに認めて、居心地のいい当たり前の人間関係をつくることが一番大事なんだと、そこがようやくわかってきた、ということですね。

西村 これまでの医療が仮に病気中心主義だったとしたら、もっと人間中心主義あるいは関係中心主義になってきたんだなって、思いながら聞いていました。

向谷地 それはもう昔っから言われてきたことなんですけどね。「病気を見るな、人間を見るんだ」っていうことは。はるか昔から教科書にはそう書かれているんですけど、結局はそうじゃないほうに走ってしまうという専門家の病ですよね。

西村 4つ目の質問に戻りますが、美術館はどんな潮流の中にいると思いますか？

稲庭 そうですね。美術館活動も、もの中心、コレクション中心だったところから、特に21世紀になってからは人や人の体験というものを中心に語られるような流れになってきました。精神医療と同じなのかもしれませんが、やっぱりヨーロッパがそういう潮流を大きくつくっていて、美術館の中の組織構造なんかも、どう人々と大きな関わりをつくっていくかというのが、これから考えていくべき大きなファクターになっているとは思います。

5 向谷地さんの活動を支えるモチベーションの源泉は？

西村 最後に大きな問いです。2つ目の質問なんですけど向谷地さんのモチベーションを支える源泉になんとか触れてみたいです。

向谷地 これは私も何だろうって思うんですけどね。これだけは言えるのは、例えばべてるの活動にしても、何か精神障害者のためにとか、こういう人たちを救おう、っていう発想じゃない。やっぱり基本的には徹底して自分という人間に対する興味関心、問題意識だと思いますね。私には、自分という人間に対する興味や関心とか、問いみたいなものが常にあって、だからべてる的な世界というのは、私自身が、ああでなければ生きられない世界そのものなんだろうなといつも思いますね。そういう意味で常に自分という人間の謎というものがあって、そこを常に考えていくという、非常に「自分中心」です。その原動力と言うのは、正義感だとかヒューマニズムと言うよりも、人間としての“情けなさ”とか“惨めさ”に近い感覚が、大事なモチベーションの一つになっている気がしますね。ただ、それはいわゆる欠点ではない。私自身が、べてる的な世界以外では生きられない、という制約の中で生かされている感じがしますね。

稲庭 向谷地さんはすごく、アーティストに近いですよね。

西村 私も聞いていてすごくそう思いました。社会的な目標だとか、達成しなければいけない正義だとかそういうことではなくて、向谷地さん自身が自分を通じて、人間は何でこうなんだとか、人間が向かうところを考えるということなんですね。

向谷地 自分の生きやすい条件とかね。たとえば私は人に支配されたり管理されたりするのは非常に苦手なんですよね。

ちょうど小学校から中学校に入ったときに、突然丸坊主にさせられて、詰襟の学生服を着せられて、シューズの色も揃えさせられて。そのことに突然、身体中から拒絶反応が生まれてくる。そしてその拒絶反応が周りに、特に先生に伝わるわけですね。そしたら私は一応それなりに普通の学生を装っていたつもりなんですけども、常に先生から扱いづらい問題生徒として生徒相談室に呼ばれるわけです。クラス委員長をやっていたのにですよ。そこで「おまえはこうだああだ」と、くどくど言われ、最後は殴られるわけですよ。時代ですからね。

私の人生のキーワードは「殴られる」なんですね。常に自分の感性を大事にして、これが大事だと思ってやっていくと、必ず人とぶつかる。摩擦が生じる。周りからバッシングされる。職場に行って突然お払い箱になったのも、私にしてみれば殴られた感覚です。一貫して殴られるんですよ。そういう意味では、自分の大事なひとつの問いですよね、殴られるっていうことが。テーマですよ。

西村 それはずっと反復されるんですね。

向谷地 そうですね。何度も現れる。私のことが苦手だと思うタイプの人は、だいたい同じようなタイプの人たちです。ずっと。非常にきちんとまじめに生きている人たちから見ると、こういうのはねえ…。でも、そういう人たちは別に悪い人ではない。普通これが煮詰まったら病気っていうところまでジャンプする人たちがいるんですが、私はジャンプ力がないものですから、病気になれない。かなりいい線にはいくんですけどね。なかなかそこまではいけない。

伊藤 なんだかハングリー精神ともまた違う。反発しない、この感じは何でしょうね。

向谷地 殴られてはきたけど、人を殴ったことはないんですよね。殴られっぱなしなんですよ。
それに関係して面白いのが、私には「人を恨む」とか「嫌いになる」という能力が、欠損していることなんです。それが、できない。そんな感情を、これっぽっちも抱えられない。持とうとすると、途端に“自分が壊れる”感覚があるんです。我慢でもないし、強さでもない、誰よりも脆弱なんです。

活動という「ものづくり」

西村 いよいよ時間になりましたので、最後ひとことずつ喋っておしまいにしていきましょう。向谷地さんは本をたくさん出されていてテキストはたくさんあるのですが、やっぱりご本人の肉声というか、存在感含めて受け取るものって全然違いますよね。それを皆さんとこうして共有できてすごく幸せだなと思いながら、今日はここに立っていました。

伊藤 最後のお話はすごく印象的で、まだ考え中なのですが、立ち位置を変えるってことだなと思いました。普通に考えたら、殴られたら殴り返すとか、殴られたら嫌になって超越しちゃって病気になるとか、そういった反応になると思うんですが、でも向谷地さんは殴られても違う風に解釈するんですね。「柔よく剛を制す」みたいな感じです。ちょっと立ち位置を変えるとものごとの見方が変わって、世界も変わる。ちょっと立ち位置を変えることで、自分だけじゃなくて、自分の周りの人たちの見方も変えてしまう。向谷地さんの立ち回りの芸術性みたいなものがすごいなと思いました。

稲庭 今日のサブタイトルは「べてる式×とびら式」だったわけなのですが、べてるが精神障害をお持ちの方が活動しているということと、美術館と、このふたつにどんな共通性があるんだろうと思って見ていた方もいらっしゃると思います。でも、今日改めてお話を聞いて、アートと、向谷地さんたちが活動

されている中で見出していらっしゃることとは実はすごく深いところでつながっているんだなと感じました。まさにアーティスティックな向谷地さんの活動を聞いて、ひとつ合点がいった、そんな感じがしています。

向谷地 私はソーシャルワーカーなんですが、こういう仕事をずっとしてきて思うのは、自分は“ものづくり”をしてきたのかな、という気がしています。ものをつくってきたという感覚。

当事者研究という活動も、こういうものがあったら便利になるだろうとか、暮らしやすいだろうなって、開発に近い感覚で研究しているんだという感じがしていて、そこにアートの発想とかデザインというのは非常にマッチするなとも思っています。やっぱりこの領域というのは今後大事になってくるなという気がして、今日は楽しかったです。ありがとうございました。

［編集］小山冴子、福井尚子　［編集協力］米津いつか（ノマドプロダクション）　［デザイン］安藤次朗